

# サポートシートを軸とした専門性向上パッケージの実践研究 特別支援教育の現場から専門性を共有する

武井 恒

Takei Hisashi

## 要旨

全ての教師に特別支援教育に関する専門性が求められている。しかし、現状では専門性が十分に担保されていない。そのため、教職経験年数や学校種を問わず、特別な支援を必要とする児童や生徒への一定の指導や支援を可能にする実践的な資料やプログラムの整備が不可欠である。そこで本研究では、特別支援教育に携わる教師の専門性向上を目的に、サポートシートを軸とした「専門性向上パッケージ」を開発し、その有効性を検討した。まず、山梨県内外の特別支援学校教師 38 名を対象に質問紙調査を実施し、「将来を見据えた指導計画」や「複数担任による授業づくり」に課題があることを明らかにした。次に、行動の背景を探り、将来の姿を見据えた支援を記入するサポートシートと指導・支援に必要な教材を選定する教材バンクを活用した実践を行った。その結果、児童の行動変容が見られ、教師にとっても支援策検討の有効な手掛かりとなった。今後は、事例の蓄積や対象障害・学校種の拡大、教材バンクや QA シートを含むパッケージ全体の充実を図り、専門性を個人だけでなく組織で担保する仕組みづくりを目指す。

キーワード：特別支援教育、専門性向上、研修

## I. 問題と目的

### 1. 研究の目的

本研究は、教職経験年数や学校種を問わず、特別な支援を必要とする児童や生徒への一定の指導や支援ができる、教師のための関わり方のヒントになる資料やプログラム（以下、専門性向上パッケージ）を作成することを目的とした。

### 2. 目的設定の背景

#### i. 特別支援教育を必要とする児童生徒数の増加

文部科学省（2023）によると、図 1 のように日本における特別支援教育を必要とする児童・生徒数は増加傾向にある。とりわけ小中学校での増加が顕著である。

山梨県教育委員会（2025）によると、令和7年5月1日現在で、特別支援学級については小学校に 487 学級、中学校に 235 学級、計 722 学級が設置され、2762 人の児童・生徒が在籍している現状である。

このように、特別支援教育を取り巻く背景に目を向けると、特別支援学級や通常学級に特別支援教育を必要とする児童・生徒が増えている現状がある。だからこそ、あらゆる教師に特別支援教育の専門性が求められる。

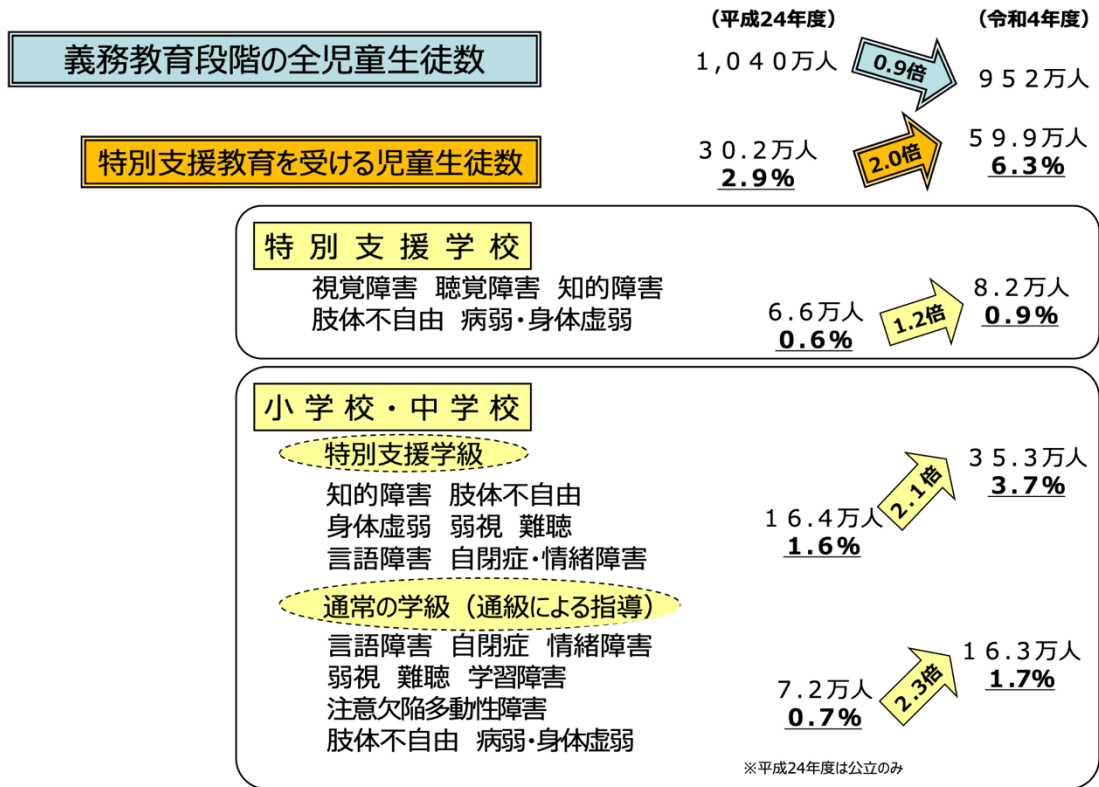


図1. 日本の特別支援教育の現状について

ii. 求められる専門性

中央教育審議会の答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(中教審第228号)において、「新時代の特別支援教育の在り方」について複数の観点が示されている。その中でも注目すべきは「特別支援教育を担う教師の専門性の向上」である。

特別支援学校、特別支援学級、通級による指導を担当する教師に専門性が求められることは当然であるが、それにとどまらない。答申では、全ての教師に対し、障害特性に関する理解、特別支援教育に関する基礎的知識、個に応じた分かりやすい指導内容や指導方法の工夫を行う力が求められることが明記されている。すなわち、通常学級を担当する教師であっても、特別支援教育に関する専門性は必須の資質である。

山梨県教育委員会(2020)でも、「専門性の向上」「特別支援教育の充実」「特別支援学校と他校種との人事交流の促進」を課題として掲げている。竹林地(2014, 75)は、「特別支援学級担任者の専門性の向上については、過去にたびたび提言されてきたが、専門性を担保する効果的な教育行政施策の実施には至っていない」と指摘している(\*文献1)。さらに日野ら(2019, 92)も、「特別支援教育担当教員の専門性を高めることは、今後の特別支援教育の充実を図る上で、ますます重要になる」と述べている(\*文献2)。

以上のことから、専門性や指導力の向上は、特別支援教育に携わる教職員に求められる基本的かつ重要な課題であるといえる。加えて、専門性を支える仕組みの構築も不可欠で

ある。教育現場では、児童・生徒の多様な実態に対応するため、すべての教職員が一定の知識・技能を有し、質の高い教育活動を提供しなければならない。筆者が所属した特別支援学校では、100名以上の教職員が在籍していたが、経験年数に差があっても同様の責務を負っていた。一方で、特別な配慮を要する子どもは特別支援学校だけでなく、特別支援学級や通常学級にも在籍しており、各現場の教師は日々対応に苦慮しているのが実情である。特に、経験のない、あるいは経験の浅い教師が特別支援学級の担任を任されるケースも少なくない。

このような状況においては、学校種を超えて専門性を共有する仕組みが強く求められる。特別支援学校のノウハウを特別支援学級や通常学級で活用し、逆に特別支援学級や通常学級での学級経営や集団指導の知見を特別支援学校で生かすことが望ましい。互いの専門性を共有することにより、困難を抱える子どもたちへの支援をより効果的にすることができる。

以上の理由から、特別支援学校および特別支援学級を対象に研究を進め、専門性向上の方策について検討することとした。

## II. 研究の方法

山梨県内の知的障害特別支援学校、及び県外の特別支援学校において、質問紙調査を行った。その後、サポートシートを用いて指導実践を行った。

## III. 研究方法の詳細・結果・考察

### 1. 質問紙調査

#### i. 目的

特別支援学校担任の実践上の課題を明らかにし、解決法の一つとして専門性向上パッケージ開発のための基礎資料とすることを目的とした。

#### ii. 調査対象

調査対象は、特別支援学校で現在担任を務めている教員、または過去に担任経験のある教員とした。

#### iii. 調査の状況や手続き

2021年5月11日から6月30日にかけて、県内の特別支援学校（以下、K支援学校）および県外を含む他校の教員に協力を依頼した。対象者には質問項目を送付し、紙面またはウェブにて回答を求め、回収した。最終的に、合計38名から回答を得た。

#### iv. 調査項目の作成のための基礎資料

調査項目の作成にあたっては、千葉県総合教育センター 特別支援教育部（2015）の「特別支援学級担当者の専門性向上パッケージの開発に向けた質問紙調査」を参考にした。アンケートの主な項目は以下のとおりである。

#### v. アンケート項目

アンケート項目は、①回答者について②学級経営について③個別の指導計画について④授業について⑤関係者との連携について⑥専門性についての6領域で構成した。

なお⑥については、専門性について現状を把握するため、山梨県立かえで支援学校(2018)を参考に筆者が新たに追加した。具体的には次の6つの観点からなる。

- ・専門性1：障害特性の理解
- ・専門性2：子ども理解
- ・専門性3：将来を見据えた指導計画を立てる
- ・専門性4：学級づくり・授業づくり
- ・専門性5：保護者や関係機関との連携
- ・専門性6：研修への意欲・向上心

#### vi. アンケート結果と考察

個別の指導計画の作成や活用に関して困っていることや課題として、「個別の指導計画に基づいた授業、指導・支援及び評価」が最も多く挙げられた。(図2)

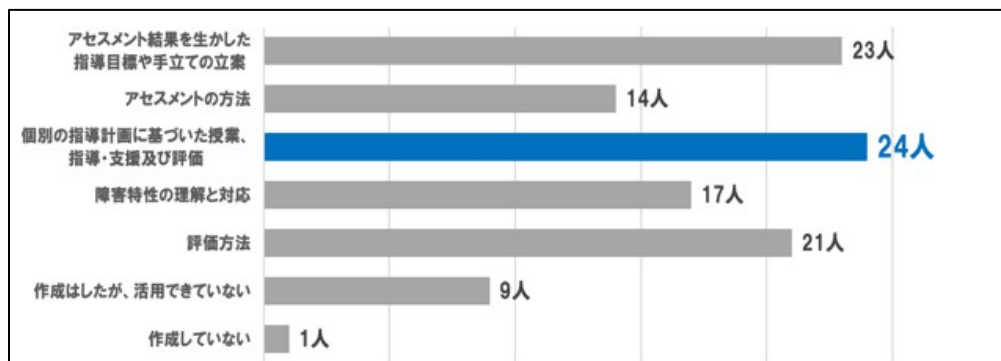


図2. 個別の指導計画の作成や活用に関して困っていることや課題 (n=38)

授業づくりに関して困っていることとして、「単元・題材計画の作成の仕方」が最も多く挙げられた。(図3)

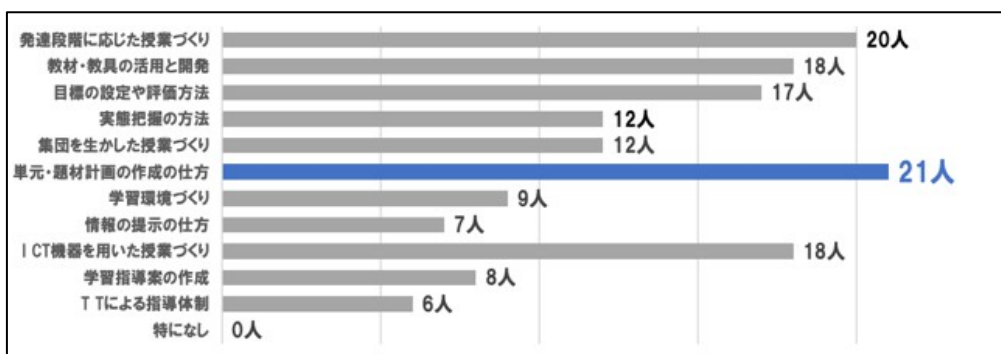


図3. 授業づくりに関して困っていることや課題 (n=33)

困っていることや課題を解決するための方法として、「先輩や同僚に相談」が最も多く挙げられた。(図4)

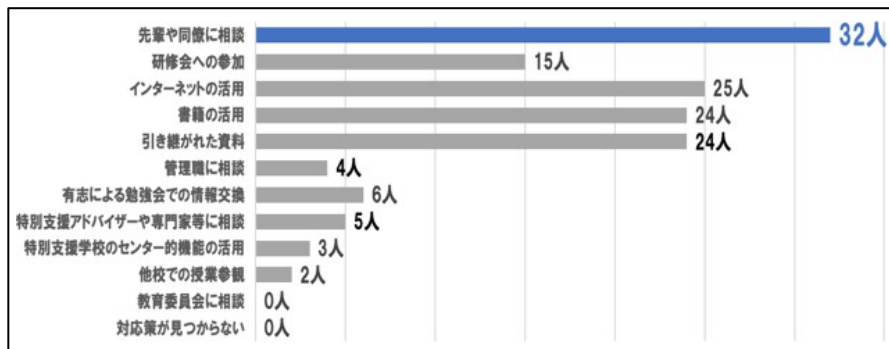


図4. 困っていることや課題を解決するための方法 (n=36)

専門性に関する調査は、4件法（1：できない 2：ややできない 3：ややできる 4：できる）を用いて実施した。

前述の専門性1～6の項目のうち、「専門性3：将来を見据えた指導計画を立てる」の項目に関しては、半数以上の回答が「2（ややできない）」であった。（図5）

この結果から、特別支援学校教諭という、ある程度高い専門性を有する教師であっても、将来を見据えた指導計画の立案に関しては、不安を抱えていることが明らかになった。

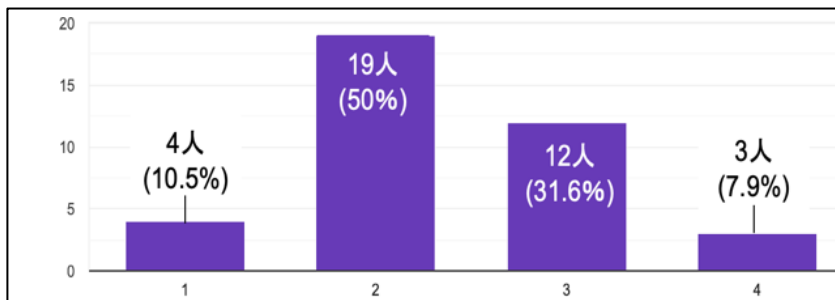


図5. 専門性3：将来を見据えた指導計画を立てる (n=38)

専門性4に関する調査では「2（ややできない）および3（ややできる）」に回答する割合が高かった。この結果から、特別支援学校においては、複数担任による学級づくりや授業づくりが重要な課題であることが明らかとなった。（図6）

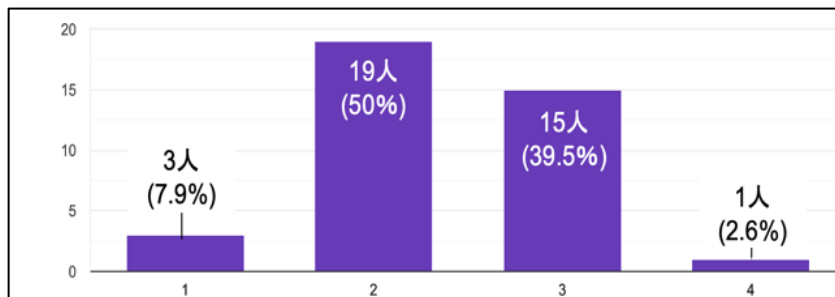


図6. 専門性4：学級づくり・授業づくり (n=38)

以上のアンケート結果から、①将来を見据えた視点②複数担任での学級（授業）づくり

が重要なキーワードとして浮かび上がった。さらに、専門性向上のためには研修会が必要であると感じ、③研修会とした。これらの3点を指導実践に取り入れることを決定した。

## 2. 専門性向上パッケージの作成

### i. 専門性向上パッケージ概要

アンケート結果をもとに、筆者のこれまでの指導実践から専門性向上に必要と思われる項目を6つにまとめ、専門性向上パッケージの内容として整理した。図7に示したように、専門性向上パッケージは、①サポートブック(サポートシートを集めたもの)②教材バンク③デジタル教材④QAシート⑤研修パッケージ⑥情報の6つから構成されている。

本研究では、①サポートブックを構成するサポートシートを中心に取り上げた。

特別支援教育に携わる教師の専門性を向上させ、担保するための実践的研究～学校種を超えた専門性を共有するための仕組みづくり～ 武井恒

特別支援教育専門性向上パッケージ (1サポートブック 2教材バンク 3デジタル教材 4QAシート 5研修パッケージ 6情報) で特別支援教育に携わる教師の専門性の向上と担保を目指す。

**1サポートブック**  
主に、自立活動の授業実践。子供の課題の背景を探り、指導、支援の実践をまとめたもの。子供へかかわる際のヒントとなる。  
サポートブック(各教科編) Vol.1  
サポートブック(自立活動編) Vol.1  
課題一覧(目次)  
サポートシート(個々の実践)

**2教材バンク**  
教材バンクとは、自作教材を含めた教材を登録し、貸し借りができるシステム。  
【カテゴリー】  
01.初期学習 02.概念形成  
03.記号操作 04.外国語  
05.理科 06.社会  
07.保健・体育 08.美術・図工  
09.音楽 10.職業・家庭  
11.作業学習 12.自立活動  
13.生活単元 14.日常生活  
15.遊びの指導 16.行事  
17.情報教育 18.余暇

**3デジタル教材**  
【Teach U教材シリーズ】ダウンロードし、可変できる教材。  
①1分タイマー ②6分割ルーレット  
③動く丸 ④なにかな?文字  
⑤ケーキを探せ ⑥同じものはどれかな? など  
Teach U教材について  
→<https://musashi.educ.kumamoto-u.ac.jp>

**4QAシート**  
特別支援教育に関連した質問をまとめたシートシリーズ。  
1特別支援教育おすすめ書籍 2自作教材について  
3特別支援教育に関する雑誌 4特別支援教育に関する市販教材 5特別支援教育に関するおすすめ絵本  
6知能検査、発達検査 7自作教材サイト  
8心のケアとストレス解消 9おすすめアプリ  
10自立活動について など

**5研修パッケージ**  
4つのカテゴリー(動画、教材、教科書、デジタル教材)で情報をまとめている。動画を視聴して学び、実際に教材等で教材研究を行う。  
特別支援教育研修パッケージ  
動画 教材 教科書 デジタル

**6情報**  
最新の教育情勢や世界の動向、他県の教育実践などの参考になる情報を随時、発信する。

図7. 専門性向上パッケージ概要

### ii. サポートシート

図8に示すように、サポートシートは、子どもの行動から背景を探り、より良い支援、指導をするためのツールである。「How to」をすぐに求めるのではなく、行動の背景を探る「Why」の視点を大切にすることがその特徴である。また、応用行動分析の観点から子どもの行動の背景を探り、必要な指導や支援を行う。

| サポートシート |                           | 児童生徒名                          | 作成者 | 作成日 | No. 1 |
|---------|---------------------------|--------------------------------|-----|-----|-------|
| A 背景・原因 | B 行動・課題                   | C 指導・合理的配慮・結果（教師の指導・支援）        |     |     |       |
| 行動の背景   | 子どもの課題となる行動               | 教師は何をしたか？<br>→子どもはどうなったか？（ ）   |     |     |       |
|         | 将来を見据えた視点<br>（どんな姿を期待するか） | 教化の視点<br>（日常生活や集団授業等で変化が見られた点） |     |     |       |

図 8. サポートシート

サポートシートのポイントは、行動の背景を考える視点と将来を見据えた視点を取り入れたことである。行動の背景を考えて記入することで、子どもを多面的に実態把握することができる。また、行動の課題から将来を見据えた姿を考え、それを記入することで、系統的な指導や支援を意識することができる。

サポートシートはあくまでより良い指導や支援をするためのツールであり、記入することが目的ではない。記入する中で、様々な課題となる行動の背景や指導、支援方法を探っていくことが大切である。

### 3. 指導実践

#### i. 使用対象クラスと対象者及び実施期間

K支援学校1年生6名、及び担任3名（I 教諭：特別支援学校担任1年目、F 教諭：特別支援学校担任3年目、筆者）（実施期間：2021年4月～2022年3月）

K小学校特別支援学級1年生1名、2年生2名、3年生3名、4年生3名、5年生6名、6年生3名、及び特別支援学級担任3名（S 教諭：知的特別支援学校担任1年目、A教諭：自閉症・情緒障害特別支援学校担任1年目、筆者）（実施期間：2025年4月～2025年7月 研究継続中）

#### ii. 活用方法

第一段階として、筆者は同クラスの特別支援学校担任（以下、I 教諭、F 教諭）にサポートシートの見本を提示し、書き方等を説明した。その後、各担任が児童の行動上の課題

(B欄)を記入し、続いて想定される背景(A欄)を複数挙げた。さらに、行動の課題と関連付けて、将来を見据えた視点(3年後に期待する姿)も記入した。

第二段階では、担任2名と筆者が協議し、課題に対応する指導・支援の実践案を複数考案し、C欄に記入した。その後、実践を行い、児童の反応を記録した。加えて、効果の有無を記入し、指導・支援の妥当性を検証した。この検証は、週1回15分程度のクラス会議を設けて実施した。

第三段階では、指導・支援の結果を基に、般化の視点(日常生活や他教科での変化)を記入した。また、複数回の実践と協議を重ねることで、課題の背景(A欄)や指導・支援方法(C欄)を追加できた。これらの記録を整理したものを図9に示す。

| サポートシート  |  | 児童生徒名   | A | 作成者  | 武井恒 F教諭、I教諭 | 作成日 | 2021/05/28 6/17 10/26 | No.1 |             |
|--|--|---|---|--|-------------|-----|-----------------------|------|-------------|
| <b>A 背景</b><br>行動の背景<br>①途中で止められるのが嫌。<br>②自分のタイミングで終わりたい。<br>③止められ方が気に入らない。(教師の言動、かかわり方)<br>④頭を叩いたり、ものを投げたりすることで、周りに注目をしてほしい。<br>⑤頭を叩いたり、ものを投げたりすることで、気持ちを発散している。<br>⑥音をならせたい。 |  | <b>B 課題</b><br>子どもの課題となる行動<br>行動を途中で止められると、自分の頭を叩いたり、ものを投げたりする。 |   | <b>C 指導・支援と結果</b>  |             |     |                       |      | <b>第二段階</b> |
|  |  | <b>将来を見据えた視点</b><br>(どんな姿を期待するか)<br>自分なりに折り合いをつけて行動や気持ちを切り替える。  |   | 教師は何をしたか?<br>→子どもはどうなったか? ( )<br>①とことん飽きるまでやらせる。<br>→納得いくタイミングがある。タイミングよく終わりにすると、終わることができた。(○)<br>②タイムタイマーを使い、終わるタイミングを知らせる。<br>→注目し、待つことは難しい。待つといいことがあるようにもしたい。(○)<br>③違う活動を提案して、切り替えさせる。<br>→投げてしまっって、切り替えは難しい。(△)<br>④叩く、投げる代わりに行動を伝える。例)頭ではなく、手をバンバンする、投げるのではなく、握るなど。<br>→手をバンバンは何度かできたが、相変わらず頭は叩く。(△)<br>⑤不安定になってしまったら、とけあい動作法(頭や肩への圧迫刺激)を行う。<br>→肩への圧迫刺激は逆効果。くすぐりたい感じ。頭への圧迫刺激は多少落ち着いていた。(○)<br>⑥不安定になってしまったら、タオルやマットをかぶせる。(視界を遮る。)<br>→タオルをかぶせて側頭部へ圧迫刺激をすることで、多少落ちついた。(○)<br>⑦外に出てクールダウンをする。<br>→校内一周、音楽室、図書室で過ごす落ち着くこともある。(○) |             |     |                       |      | <b>第三段階</b> |
| <b>般化の視点</b><br>(日常生活や集団授業等で変化が見られた点)<br>①言葉で「やめてよ」「ごめんね」など言えるようになった。<br>②自らの意思で活動を終わることができるようになった。  |  |   |   |  |             |     |                       |      |             |

図9. サポートシート記入段階

K小学校でも同様に、筆者が見本を提示した上で同様の手順を踏んだ。さらに、専門性向上パッケージの教材バンク(図10)を併用した。使用した教材は、しっぽ引きゲーム用の「ビニールしっぽ」である。既存の教材を自立活動の時間に活用し、負けを受け入れることが苦手な児童に対して取り組みを行った。その結果、繰り返し実施する中で、児童は徐々に負けを受け入れられるようになり、友達に対して「ドンマイ」などのポジティブな声かけをする姿も見られるようになった。

特別支援学級において、教材は極めて重要である。しかし、教材を一から作成するには多くの時間を要し、さらに効果的な教材や活動に関する知識がなければ作成自体が困難である。そこで、教材バンクを活用することで、授業の質と専門性を一定程度担保することが可能になる。本実践は現在も継続中であり、今後も取り組みを進化させていく予定である。

| 特別支援教育 教材バンク  |  |
|---|--|
| 教科・領域名  | 自立活動   |
| 教材名(作成日)  | ビニールしっぽ(しっぽ引きゲーム用) 2016.5  |
| 作者  | 武井恒  |
| 概要(説明・教材の写真を必ず入れてください)  | しっぽ引きゲームは、写真のようにビニール紐の端に洗濯ばさみをつけ、お互いの服の裾に挟み、引っ張り合うゲームである。自立活動の時間に行った。(人間関係の形成を主にねらう)   |
|  |  |
| 貸し出し ( <input checked="" type="radio"/> 可 ) <input type="radio"/> 不可 )            |  |
| 教材の段階 (太田ステージや発達と運動の高次化理論等) ※わかる範囲で   |  |
| 教材のねらい  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①負かけを受け入れることができる。</li> <li>②勝ち負けのルールを理解することができる。</li> <li>③人を意識したやりとりができる。</li> <li>④手指の巧緻性を高めることができる。</li> </ul>   |
| 教材の工夫点・操作方法等  | <ul style="list-style-type: none"> <li>①簡単に作れる。(材料はビニールひもと洗濯ばさみ)</li> <li>②いつでも、どこでも、だれでも活動できる。(どんな障害があってもなくても、年齢差があっても楽しめる)</li> <li>③勝負がすぐにつく。(3秒)</li> <li>④どちらが勝ったか一目で分かる。(洗濯ばさみが残っていた方が勝ち)</li> </ul> |

図10. 教材バンクシート

### iii. 結果と考察

第一段階の記入は5月に行い、第二段階および第三段階は週1回のクラス会議において継続的に話し合いながら記入した。

K 支援学校における指導は、クラス担任3名によるチームティーチングで実施した。課題から背景を検討する過程で、複数の指導・支援方法を導き出し、その中から優先順位を設定して一つずつ実施した結果、児童に行動の変容が見られた。

具体例として、A 児において「行動を途中で止められると、自分の頭を叩いたり、物を投げたりする」という課題が挙げられた。A 児は知的障害を伴う自閉症と診断されており、発語は限られており、コミュニケーションに課題がある。一方で、興味のある事物や活動に対しては高い集中力を発揮し、持続的に取り組むことができる。そのため、活動を途中で中断されることに対して、前述のような課題行動が出現していた。

担任が観察と協議を重ねた結果、行動の背景として「自分のタイミングで終わりたい」「止められ方が気に入らない」などが想定された。将来を見据えた視点としては、「自分なりに折り合いをつけて行動や気持ちを切り替える」が設定された。これは、行動や情動のコントロールの獲得を目指すものである。

そこで、筆者と担任2名で複数の支援方法を検討し、サポートシートに記入した。例としては、「とことん飽きるまでやらせる」「終わるタイミングを知らせる」などである。実践を繰り返す中で、A 児の行動に変化が見られた。特に有効であったのは「終わるタイミングを知らせる」支援である。A 児の課題行動の背景の一つとして「止められ方が気に入らない」ことが考えられたため、終了時期を視覚的に提示する目的でタイムタイマーを導入した。当初、A 児はタイマーの意味を理解できず、関心を示さなかったが、継続使用

することで時間を量的に把握することが可能になった。2学期終了時には、タイマーの残り時間を確認し、終了が近づくと自ら活動を中断できるようになった。これにより、自己の行動を意識的に調整できるようになり、自分の頭を叩く、物を投げるといった行動は著しく減少した。

K小学校においても同様に、サポートシートを用いた実践を行った。ただし、特別支援学級では担任が単独で指導を行う場面が多く、相談相手がいないことに不安を感じるという意見が聞かれた。このことから、「何を相談するか」よりも「誰に相談するか」が重要であることが示唆された。そこで、集団における自立活動の時間にチームティーチングを導入し、その場を活用して検証を行った。サポートシートを用いることにより、各学級の児童だけでなく、他学級の児童の実態を把握する貴重な機会となった。また、教材バンクを併用することで、行動の背景を踏まえた具体的な授業案の検討も可能となった。

一つのサポートシートを、同様の行動課題を有する児童にそのまま適用できるわけではない。しかし、指導や支援を検討する際の一助となる可能性がある。特別な支援を要する児童への対応において、経験の浅い教師は不安を感じやすい。そのため、サポートシートが関わり方の手掛かりとなることが期待される。今後は、多様な事例を蓄積し、量と質の両面で充実を図ることが求められる。ある児童に効果がなかった支援であっても、別の児童には有効な場合があるためである。

#### IV. 研究成果と今後の課題

##### 1. 成果

本研究の成果は、①複数名によるサポートシートの記入および検討により、児童のアセスメント（実態把握）を丁寧に実施できたこと、②将来を見据えた視点や般化の視点を踏まえた指導・支援が可能となったこと、③研修会等を通してサポートシートの普及を図ることができたことの3点である。

複数名でサポートシートの作成に取り組むことで、行動の背景や指導・支援を多面的に検討することができた。また、同一の支援方法を複数の教師で共有することにより、児童のアセスメントをより精緻に実施することができた。複数の視点を取り入れることで、従来は見えてこなかった側面が議論の中で明らかになり、児童を多面的に把握することが可能になった。このように、複数の視点による実態把握は、今後も重要な要素であると考えられる。

さらに、教員同士の対話を通じて、将来の姿を見据えて課題を再検討する場面もあった。逆に、現時点の課題から将来を見通した姿を想定することで、系統的な指導を意識する契機にもなった。

また、般化の視点を意識した指導・支援を行うことができた。特別支援学校では、学習内容を日常生活に生かす視点を重視しており、特定の場面で習得した技能や知識を他の場面でも活用できるようにすることを目指している。知識が断片化しやすい児童にとって、般化を意識した指導は極めて重要であり、これは小学校特別支援学級においても同様である。

サポートシートは作成すること自体が目的ではなく、その活用が最も重要である。そのため、サポートシートの普及を図る必要がある。筆者は勤務校で研修会を開催し、校内通

信を発行するなどして周知を進めた。これにより、研究対象クラス以外の担任にもサポートシートの使用法や有効性を伝えることができた。

なお、K 支援学校では 2018 年～2019 年に、校内研究の一環として全職員が一人一事例の研究に取り組み、その成果をサポートシート（旧称：合理的配慮分析シート）にまとめ、冊子化した。この取り組みは、特別支援教育に初めて携わる教師の参考資料として活用されてきた。本研究では、その蓄積を踏まえ、教材バンクの充実を図るために教材を収集し、教材展を開催するなど、教材の共有化も進めた。

加えて、勤務校外での有志研修として、2020 年 3 月に「山梨自立活動研究会」を発足させた。現在、会員は 43 名（小学校教諭、特別支援学校教諭、ST、OT）であり、月 1 回、サポートシートを活用した事例検討を実施している。また、2023 年には県内の特別支援学級担任に呼びかけ、オープンチャットを通じて情報共有を行っている。現在 116 名の教員が参加し、サポートシートを用いた実践交流や特別支援教育に関する情報交換を行っている。

## 2. 課題

本研究の課題は、①サポートシートの充実（質・量、各障害種への対応）、②サポートシートの普及（研修会の実施）、③専門性向上パッケージの充実および更新、の 3 点である。

本研究における対象の障害種は主に知的障害であった。しかし、障害種が異なれば、行動の課題やその背景も異なり、それに伴って指導・支援の方法も変化する。今後は、対象を知的障害に限定せず、肢体不自由や発達障害などにも拡大していく必要がある。また、対象を特別支援学校にとどめず、特別支援学級や通常学級にも広げていくことが求められる。

サポートシートを普及させるためには、研修会を継続的に開催し、多くの教員に理念や活用方法を伝えることが不可欠である。その実践を通じて、サポートシートの有効性を検証していくことが重要である。

さらに、専門性向上パッケージはサポートシートのみで構成されるものではない。他の要素についても一層の充実を図り、最終的には専門性向上パッケージを総合的に活用することで、個々の専門性の向上だけでなく、組織として専門性を担保する仕組みを構築することを目指す。

## 3. 今後

本研究を通じて、サポートシートを中心とした実践が、特別支援学級や特別支援学校における課題解決に有効であることを確認できた。しかし、これは終着点ではなく、新たな出発点である。子どもたちの可能性を最大限に引き出すためには、教師自身が学び続け、専門性を高める努力を継続する必要がある。

専門性向上パッケージには、サポートシートに加え、教材バンクや QA シートなど、教師同士が知見を共有し、支援を充実させる仕組みを備えている。特に教材バンクは、現場で埋もれている有効な教材を発掘・共有するための重要な手段であり、個々の教師の経験を学校全体、さらには地域や全国へと広げる基盤となる。

SNS（インスタグラム等）を活用した情報発信と共有も、専門性の向上に寄与する。情報が一つ増えることで、指導や支援の引き出しが増え、対応の幅が広がる。特別支援教育には、すべての子どもに通用する万能な方法は存在しない。しかし、多様な視点と知識を蓄積することで、子ども一人ひとりに最適な方法を見出すことは可能である。そのためには、教師が孤立せず、互いに学び合い、専門性を共有する文化を築くことが不可欠である。

本研究で得られた知見は、今後の取り組みの基盤となるものであり、専門性向上パッケージのさらなる充実を図ることで、教師の専門性を個人から組織へと広げ、特別支援教育の質の向上に寄与できると考える。

## 文献

- 1 竹林地毅（2014）：小学校特別支援学級担任の専門性向上に関する調査、特別支援教育実践センター研究紀要、12、75～82.
- 2 日野久美子、井邑智哉、納富恵子、中山健（2019）：教員の特別支援教育に関する専門性の資質・能力についての分類－専門性の高い教員を対象とした調査から－、佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要、3、92-97
- 3 千葉県総合教育センター特別支援教育部（2015）：特別支援学級担当者の専門性向上パッケージの開発に向けた質問紙調査
- 4 文部科学省（2023）：「令和4年度 特別支援教育に関する調査結果について」（特別支援教育体制整備状況調査、通級による指導実施状況調査等
- 5 文部科学省（2021）：『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第 228 号）
- 6 山梨県教育委員会（2025）：令和7年度山梨の特別支援教育
- 7 山梨県教育委員会（2020）：やまなし特別支援教育推進プラン 2020
- 8 山梨県立かえで支援学校(2018)：教師の専門性を向上し、担保するための実践的研究. 山梨県立かえで支援学校平成 30 年度研究紀要

## 付録

- 1 かえでサポートブックVol. 1、Vol. 2
- 2 インスタグラムアカウント：「たけ先生(武井恒)/特別支援の教材&支援バンク」  
URL：<https://www.instagram.com/hisat212/>